

一九七七年以前出土の木簡 (四)

奈良・平城宮跡 (第二二次南)

- 1 所在地 奈良市佐紀町・北新町・法華寺町
- 2 調査期間 一九六四年(昭39)一月～一九六五年(昭40)三月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所
- 4 調査担当者 榎本亀治郎
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

平城宮跡第二二次南の調査は、平城宮東張り出し部と称する地域の西辺部分に当る。当初この地域は、宮城東面大垣の中門の外側で、東一坊大路と一条南大路とが交わる点と考えていたが、第三九・四四四調査で東張り出し部分の存在及びその南限と東限を確認したことによって、この地区が平城宮内であることが確認された。第二二次南調査での木簡出土の総点数は五一八点である。また、木簡の出

土をみた遺構は六〇個所をこえており、発掘区域のほぼ全域から木簡が出土したといっても過言ではない。その遺構の種類も、溝、井戸、土壇、整地層、掘立柱穴等多様である。これらの木簡出土遺構のうち、木簡が顕著に出土した遺構は南北溝SD三四一〇、斜行溝SD三一五四及び南北溝SD三一五五、掘立柱建物SB三三三二の柱穴等である。このうちSD三四一〇から六五五点、SD三一五四及び三一五五から四一点、SB三三三二の柱穴から三〇点、木簡が出土している。

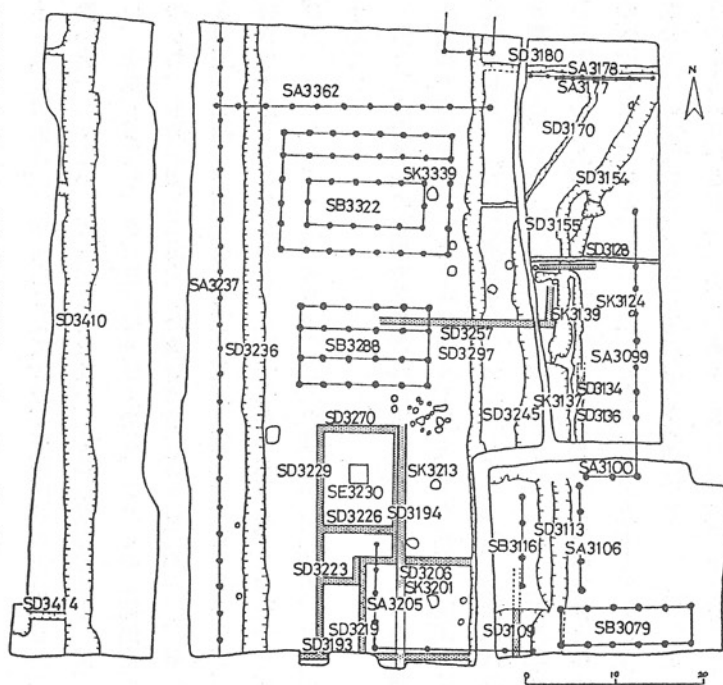
第二二次南調査の発掘で発見された主要遺構と、これらの木簡出土遺構の関係は、おおよそ次の通りである、同発掘調査区域内は南北溝SD三三三六及び南北溝SD三三九七によって、東西には三分割される。SD三三三六以西では、塀SA三三三七及び南北溝SD三四一〇があつて、平城宮の東張り出し部分と宮の本体との一応の区画をなしている。SD三三三六とSD三三九七とでかこまれた部分では、東西棟SB三三三二と同じく東西棟SB三三八八があり、その南方に井戸SE三三三〇がある。SE三三三〇は木材を井桁に

くみあげたもので、その周囲は石敷となり、さらに玉石組の小溝が井戸のまわりをとりかこんでいる。この二棟の掘立柱建物と井戸は一つの官衙組織のブロックを形成していたものと思われ、北を塀SA三三六二で、西を塀SA三三三七で区切られている。次に、SD三二九七より以東の部分は、さらに北半部分と南半部分とに細分され、北半部分は斜行溝SD三一五四及びそれに南接して南へ流下する溝SD三一五五があり、その北方に塀SA三一七七、三一七八が存在する。南半部分は東西棟SB三〇七九、南北棟(門)SB三一六などから構成されている。北半部分の遺構が中央のSB三三三二を中心とする建物群から明確に区別されていないのに対して、南半部分は、中央部分から一応独立した区画をなし、発掘区の東南方にひろがると予想される宮内のブロックの一部分かと考えられる。

以下、第二次南の発掘調査区について、前述した三つのブロックにしたがって、木簡の主要な出土遺構に關しその概要を記すこととする。

(1) 西ブロック (SD三三三六以西)

SD三四一〇 最初素掘りであったが、のち西壁は玉石積あるいは杭列で護岸している。幅3m、深さ一・五mである。第二九次及び第三二次調査でその南延長部と南端部を検出しており、平城宮南辺までつくられていたことがわかつている。木簡は溝内の三層にわたる堆積層のうち、最下層から六五点出土している。中には木簡番



第22次南調査区の木簡出土遺構配置図

号二五五一のように郷里制記載をもつものもある。

SD三四一四 SD三四一〇に流れこむ東西溝で木簡一点が出土している。

SD三三三六 素掘りの溝で、一回の改修をうけ、三時期に区別される。最も古い溝は幅二mのものである。次に古い溝は幅二mで

両岸に杭をうっている。もっとも新しい溝は幅一・二mと小さくなっている。木簡は各溝から計三三点出土している。

SA三三三七 SD三三三六の西方にある南北塀で、木簡は南から二番目の柱穴から五二点出土したが、削り屑が大部分である。

(2) 中央ブロック

SD三三九七 中央ブロックの東辺にあつて南北に流れる溝である。二時期あつて、新しい溝は幅一・二m、深さ二〇cmで部分的に側壁に玉石積がのこっている。古い溝は新しい溝よりやや幅がひろく、西壁が新しい溝より西方へ浅くひろがっている。木簡は新古両溝から三三点出土した。また新しい溝から神功開宝一点が出土している。

SB三三三二 この地域の北寄りで検出した七間×五間の東西棟建物で四面廂と北側に孫廂がついている。木簡は東妻の南から二番目の掘形の埋土の最上層にたまった砂層から四五点出土している。

SA三三六二 SB三三三二の北方三mに検出した東西塀で、木簡は東から第二、三、四番目の柱掘形内から一四点出土した。

SE三三三〇 この地域の南部中央に検出した一辺二mの方形の井戸である。井戸枠は井籠組となっており、最下段のもののみのことっていた。木簡は井戸の掘形から一点出土している。また井戸の周辺にはSD三三二九、三三〇六、三一九四、三二一九などの溝がめぐっており、これらの溝からも木簡が計五点出土している。

SK三三二三 井戸SE三三三〇の東方七mのところ検出された土塀である。一辺一・一m、深さ四〇cmの方形の土塀で、木簡は八点出土し、そのうち和銅二年銘のものと神護景雲三年銘のものがある。

SK三三六五 SD三三二七〇とSD三一九四の接続点付近で検出された土塀で、天平勝宝七歳の年紀のある木簡が出土している。

SA三三〇五 SD三三二一九の東方一mにある南北塀で、北端の柱掘形から木簡一点が出土している。同木簡は天平勝宝八歳の年紀をもっている。

(3) 東ブロック (SD三三二九七以東)

SD三三五四・五五 SD三一五四は、この地域の東北隅から中央へ斜行する素掘り溝であり、SD三一五五は北端でSD三一五四の西側にとりつき南方へ流下する素掘り溝である。SD三一五四は幅二・〇m、深さ四〇cm、SD三一五五は幅一・二m、深さ二〇cmである。木簡はSD三一五五から八点、SD三一五四からは四〇点出土している。

SA三二七七・七八 いずれもSD三二一八〇の南岸にある東西塀で、両塀の柱穴はほとんど一線にならんでいる。木簡はSA三二七七の西端柱掘形から一点、SA三一七八の東から二、三、四番目の柱掘形埋土から四点出土している。SA三一七八からは縫殿に関する文書木簡二点が出土している。

SD三三三六 SD三二五五の東にそって南へ流れる素掘りの溝である。木簡は一二点出土し、若狭国三方郡からの貢進物荷札四点がみつかった。

SD三三三三 SB三二一六の基壇の東にある素掘りの南北溝で全長二〇mを検出した。SB三二一六にともなう溝と思われ、幅一・七m、深さ三〇cmで、木簡は天平勝宝八歳十一月九日の日附をもつものが一点みつかった。

8 木簡の积文・内容

第二二次南地区での出土木簡の内容上の特色は、以下の通りである。まず縫殿・酒殿・大蔵省掌などの記載のあるものが注目され、とくに縫殿に関するものは点数も多く、それと関連しそうな女孺や衣服に関するものも出土していて、この地域の性格を考える上で注目される。またこの調査地区での木簡の出土状況について注目されることは、すでに述べたように木簡出土の遺構が六一個所にものぼったことである。溝、土壇、井戸、建物の柱穴、整地土などの各種遺構から木簡が出土し、木簡がその時々任意に破棄され埋められた状況を示すものといえよう。

SD三四一〇溝

- (1) ・×^{〔郷カ〕}清水里戸主紀臣^{〔六カ〕}歳調塩三斗
 ・×^{〔六カ〕}年^{〔六カ〕}月
 (167)×34×4 019 一五五一号

(2) 「宮津郷鳥賊二斤太」 142×13×3 033 二五五六号

(3) 「御殿」 49×22×3 022 二五六四号

(4) ×正七位上大伴宿^{〔祢カ〕}× 091 二五七〇号

SD三三三六溝

(1) 「若狭国遠敷郡佐分里三宅大人」

・「天平^{〔勝カ〕}寶^{〔勝カ〕}二年^{〔勝カ〕}」 146×(19)×5 019 二五九一号

(2) 「縫殿食口^{〔合〕}合六十五人」

・「^{〔事〕}十一月^{〔十カ〕}日宗我部浄虫^{〔女カ〕}」 287×(6)×7 081 二五九八号

(3) 「山房解^{〔合〕}」 123×35×5 019 二五九九号

SK三三四一土壇

(1) ・×^{〔五カ〕}申菜^{〔五カ〕}×

・×五十長^{〔合〕}× (150)×(25)×5 081 二六一三号

SD三三九七溝

(1) ・「巽一千卅六把

雇女十五人十一人々別七十把
 四人々別六十九把

(3) $\times$ 五九冊五 $\times$

SD三一五四付近整地層

(1) ・「借請錢十二□×

・「四月廿□× (88)×16×4 019 二七六五号

(2) ・「大和國□□郡□

・「天平宝字□□^{〔年カ〕}」 110×19×4 032 二七七〇号

(3) 「符供麻呂 米八升 右充婢長少女× (298)×32×3 019 二七七五号

(4) ・「二筑麻醬□ 御贄三□六升^{〔斗カ〕}」

・「員五十五文 □□」 181×28×3 032 二七八三号

SD三二四五溝

(1) ・「若狹國遠敷郡木津□ 壬生國足調□」

・「天平勝寶□□^{〔二カ〕}九月廿二日」 128×37×6 011 二八〇一号

SK三一三九土壙

(1) ・「若狹國三方郡能登郷^{戸主粟田公麻呂戸口}」

^{三家人}□麻呂調^{塩参斗}」 209×42×6 031 二八一八号

(2) ・「若狹國遠敷郡佐文郷三家人石万呂戸口^{三家人衣万呂御調塩三斗}」

・「景雲四年九月廿九日□古万呂」 174×35×7 011 二八一九号

SK二二四土壙

・「遠敷郡□□□

・「天平十九年十月 (137)×(34)×3 081 二八三九号

SD三一三溝

(1) ・男^{〔万呂カ〕} □□ 万呂薪

×病二人 黒金逃 犬万呂薪

×見十三人 五百嶋已上二人菅原 少咋薪

刀佩逃

良否万呂 稻人病

奴飯万呂盛 殿万呂内舎□×

・×□原採杭材遣 盛一束 天平勝寶八歳十一月九日

上野豐濱 (328)×(33)×5 019 二八四三号

9 関係文献

奈良国立文化財研究所 『平城宮木簡二』 一九七〇年

(鬼頭清明)